令和２年度第３回岡山市総合教育会議

日時：令和２年12月22日（火）

場所：市庁舎　第３会議室

○司会　失礼いたします。定刻となりましたので、ただいまから令和２年度第３回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長　よろしいですよね。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長　お願いします。

○司会　傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会　それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしくお願いいたします。

○市長　皆さん、こんにちは。先日は岡山市で58名という（新型コロナウイルスの）感染者を出しました。岡山県全体で111名ということで、多分皆さん驚かれたんじゃないかなというように思います。今日はちなみに岡山市で３名ということであります。今後、感染の拡大防止に相当力を入れていきたいと思いますが、一方で社会生活、経済活動も完全に止めるわけにはいきません。このあたりの両立をうまく図っていかなければならないというように思っております。まずは、今日も皆さんマスクをしていただいた上にアクリル板ということで、我々の中では感染対策は万全だと思いますけれども、そういう中で今日の会議を進めさせていただきたいと思います。

前回、本年度第２回の会議では、教育の情報化を議題とし、これからのデジタル社会に向けて、教育委員会、学校が今後注力すべきことについて議論をさせていただきました。本日は、現教育大綱の２つの柱、「学力の向上」と「問題行動・不登校等の防止及び解決」について改めて検証をするとともに、今求められているものは何なのか、そこからどういう子どもたちを育んでいく必要があるのか、今後の方向性について議論をしたいと思っております。

本日の会議には、第１回、第２回に引き続き、中学校長会の門田会長、小学校長会の清廣会長にご出席をいただいております。

それでは、議論を進めたいと思います。

ちなみに、今回はこの資料を作るに当たって、相当私も入らせていただいて教育委員会との間で議論をさせていただきました。実は大きくこの３年間、前の総合教育会議に基づいて私は動きがあったというように思っております。実際、学力の面でいいますと、相当全国に比べて低かった。そこを教育委員会と校長さん、先生方も一体となって行動していただいた成果だったと思います。ほぼもう平均並みになったと。平均並みになったということは、逆に言うと、様々な情報収集を各個人が行い、そして自分で判断をしていく、そういう能力がついたんではないかというように思っております。

もちろんまだまだ足らない点もあると思うんですけれども、そういう前提に立って、我々として別に偏差値を上げるだけが教育じゃない。これからの子どもたちにどういうものを求めていくのかということを随分議論させていただいたところであります。しかしながら、先週の金曜に議論をさせてもらいましたけれども、まだ途中段階のものになっております。最終的には、先週の末でありますけれども、今日の総合教育会議での議論を踏まえて、もう一度修正させていただいて、それを教育委員会が各校長会、また校長会のメンバーが各先生方と十分議論を重ねてもらって最終的な教育大綱にしていこうと、こういうような意志を固めたところであります。取りあえず今の原案について説明をいただいて、それから今後の取組方針の議論に入っていきたいと思います。

まずは、教育長から説明をお願いいたします。

〇教育長　皆さん、お疲れさまでございます。次期教育大綱に向けた取組の方向性について、これをテーマにしていただきまして、ありがとうございます。平成29年２月に教育大綱を策定していただき、もうすぐ４年が過ぎようというようになっておりますが、教育委員会としましては、学校と信頼関係を育みながら同じ方向性を持って一丸となって取り組んでまいったところでございます。本日は、これまでの取組を振り返るとともに、教育委員会として現在考えている今後の方向性をご説明申し上げます。

資料１をご覧ください。

「岡山市教育大綱をもとにした取組【検証】」と書いてある資料でございますが、こちらは現教育大綱を基にした取組はどうだったのか検証としてまとめております。

現教育大綱では、「『樹人』明日の世界に雄飛する人を樹うる」を岡山市が目指す教育

として掲げていただき、岡山市の子どもに足りないものは何か、そのために必要なことは何かについて議論を重ねた結果、喫緊の課題として、「学力の向上」と「問題行動等の防止及び解決」に重点的に取り組んでまいったところであります。教育大綱を基に学校と教育委員会が同じ方向性を持って具体的な取組を進めたことで、教職員の意識が高まり、全ての学校で学力向上や問題行動等の取組が進んだと考えております。

学力の向上につきましては、この資料１の左部分にまとめてみました。児童・生徒の学力を付けるために授業を変えようという意識が高まり、成果として次の３つを挙げております。全国学力・学習状況調査の結果を基に教育委員会と学校が授業について協議する、そういう機会が増えたこと、学校においては教員が自分の授業について積極的に校長等に指導助言を求める姿が増えたこと、また教職員同士もよりよい授業づくりについて日常的に会話する姿が増えたことであります。

こうした取組を進めた結果、参考資料１の①のように、目標としていた偏差値50にほぼ到達し、全国平均レベルの学力がついてきました。

続いて、問題行動等の防止及び解決につきましては、児童・生徒の問題行動等を防ぐために毅然とした態度で指導しようという意識が高まっております。成果として、こちらも３つ挙げております。問題行動等の防止に向けて各学校が方針を明確にし、保護者等への説明を丁寧に行ったこと、教職員による問題行動等に対する実態を基にした協議が増えたこと、授業では児童・生徒が自分の気持ちを考えたり、守るべきルールなどに気付いたりする機会を増やしたことであります。

こちらは参考資料２のように小学校の暴力行為は減少したものの、目標にはいまだ到達はしておりません。また、不登校児童・生徒は増加しておりまして改善とは言えませんが、全国に比べると、やや緩やかな増加にとどまっているというところではあります。学力の向上と問題行動等の防止及び解決への重点的な取組の相乗効果によって、授業が分かることで児童・生徒の登校意欲が高まったとも考えております。

そこで、資料の一番下に記載しておりますが、今後はこれまでの成果につながった取組を継続するとともに、未解決の課題解決と社会の変化による新たな課題に対応していくことが必要であると考えております。

続いて、裏面の資料２をご覧ください。

次期教育大綱に向けた取組の継続と発展についてまとめております。

これからも継続する取組としましては、上の部分に記載をしております。

教育委員会の学校訪問や校長の授業参観などによる授業等に関する指導助言、学力調査等の結果の効果的な活用による授業、校長会等との学力向上に向けた定期的な情報交換を継続いたします。問題行動等につきましては、個々の実態に応じた協議を行うとともに、不登校児童・生徒の課題に対応するため、欠席が連続３日での家庭訪問や年間欠席が10日以上で支援計画を作成するなど、組織的な取組を徹底してまいります。

課題としましては、資料の中ほどに掲載しておりますけれども、記述式問題に対する力の弱さ、英語力の向上、新たな不登校と長期化への問題、急激で予測困難な社会の変化にそれぞれ対応することが必要であると考えております。

そのため、資料下の部分に記載しております、児童同士が意見を交わしたり、自分の考えを表現したりする授業、ＩＣＴを効果的に活用する探究活動を進めるとともに、一人一人が活躍できる機会や、相手の気持ちや考えを聴く機会を増やすことが必要であると考えております。

このように４年間で子どもたちが蓄えた力、教職員が高めてきた力、そのための取組などを継続し、さらに発展させてまいります。

続いて、資料３、次期教育大綱に向けた取組、方向性についてまとめたものでございますが、こちらをご覧ください。

これからは自分の将来の姿をイメージし、その実現に向けて自らの個性を磨き、選択と挑戦を繰り返すことができる子どもを育てることが必要だと考えております。そのため、課題となっている英語を含め、全国平均以上の学力と新規不登校児童・生徒の出現率の減少に向け、資料左側に記載している、活用力、表現力、向上心、社会性、人権尊重の精神の５つの力の育成に取り組んでまいります。

指標は右側に５つ挙げました。参考資料１を使って説明をいたします。

子どもたちの学力は全国平均レベルになりましたが、参考資料の１、①のように英語はまだ偏差値50に到達しておりません。また、参考資料１の③、④のように記述式問題の正答率は小学校については全国平均レベル、中学校については全国平均レベルより低い状態であります。これを全国平均以上とするという目標を考えました。

また、参考資料１の⑤にあります、自分は難しいことでも失敗を恐れないで挑戦していると感じている児童・生徒の割合は、昨年度、小学校84％、中学校67.7％でありました。さらに、参考資料１の６にある、自分は人が困っているときに進んで助けると感じている児童・生徒は、昨年度、小学校86.6％、中学校84.6％でありました。これらの児童・生徒

の意識を高めるため、令和元年度の数値を基準として５ポイント以上の上昇を目指したいと考えておるところでございます。不登校につきましても、出現率が下がるよう取り組みます。

そして、子どもたちの将来の姿として、資料３に戻りますが、一番下のように、一人一人がそれぞれの立場で社会に貢献し、自分の幸せを創造することができるようにと考えております。

以上で説明を終わります。本日はよろしくお願いいたします。

○市長　ありがとうございました。

それでは、意見をお伺いしたいと思いますが、我々の間で議論になった点を幾つか紹介をしたいと思います。

まずは、教育長が話をされたように、全体として全国平均並みにはなってきたと。今後も先生たちのモチベーションを守っていくためには一定の指標が必要ではないかということで、50以上というような表現をさせていただいているのが１点、それから２点目としては、これからの社会はどんな人間が必要とされるだろうかというように議論をさせていただいたときに、今までのような大規模生産で、同じように経済成長の中で人と人が、言い方が悪いかもしれませんけど、歯車になって対応していく、そういう時代ではないだろうと。したがって、一言で言うと、とがった人間をつくっていく必要があるんではないかというように議論をさせていただきました。

それで、これからは特に復活と、再復活というか、そういったこともあるだろうということで、大きく次の姿として、個性を磨く、そして選択と挑戦が繰り返せるということにさせていただいたところであります。必要な力、これはその個性を磨き、選択と挑戦を繰り返すということをブレイクダウンしていったときに、活用力、表現力、向上心というものが出てくると。ただ、重要なのは、これから今は新型コロナウイルスが蔓延していますけれども、当然ながらグローバル化というのは避けられないということでいくと、そういう多様性を見つけていく、そういう面での社会性、優しさのそういう人権尊重の精神、こういったことも当然ながら必要ではないかというような５つの整理にさせていただいたというのが３つ目です。

４つ目としては、この５つの活用力から人権尊重の精神まで、何を定量的な指標として設定するかということであります。例えば、社会性というのが新規不登校児童・生徒の出現率の低下というようにさせていただいていますが、社会性を表す指標としてこれが適当

なのかどうか。ほかに何か適当なものはないのか。もちろん１つじゃなくてもいいと思うんですけれども、一体何を設定するのがいいのかというようなことを議論をしているところであります。

大分まとまってきつつあるんですけれども、そのあたり我々の議論の過程をちょっとご紹介をさせていただいて、意見を言っていただく参考にしたいと思います。

それで、それぞれの意見をいただきますが、まずは中学校と小学校の校長会、これはもう一度議論されてますか、校長会では。まだされてないですか。会長には話は行ってますよね。ということで、もう頭の中に一回インプットされているということなんで、意見も言いやすいだろうということで、皮切りに中学校長会の会長からお話をいただきたいと思います。

○門田中学校長会長　まず、資料１、検証のところから見させてもらいましたけど、これはこれで実際に検証ができてるんだろうなという気がしました。特に学力それから問題行動を基本に見ていきますけど、最後のところです。授業が分かることで児童・生徒の登校意欲が高まった。当然学校というのは、つながる先が教室である。中学校の場合は部活動とか、いろんなことをやってきましたけど、授業改革を当然柱にしないといけないということで、この４、５年、頑張ったところです。その中で授業が分かるということで子どもたちの登校意欲が高まる。これは実際に数字として表れたかどうかというのは微妙なところがあると思います、実際。ただ、地域によっては、本当に改めて本校なんかの様子を見てても、授業改善を行うことで明らかにこれは子どもたちが変わってるなという時期もありました。

ということで、当然、授業の改善、これは大きな柱の一つだったと思いますし、特に中学校長会の場合に、小学校と比べて中学校の授業というのは小学校文化ほど発達していなかった、はっきり言って。教科担任制ですから教科ではそれぞれやるんだけれども、学校として自分たちの子どものためにどんな授業を取り組んでいくかという学校全体での取組というのは、まだまだできてなかったような気がします。それを校長が見たり、みんなで考えたりということで、ここ最近の中学校の授業は大いに本当に変わってきた。これは大きな改善点の一つだったと思います。逆に、問題行動の防止とか不登校、この辺はまだまだ課題があるんですけど、逆にこちらのほうが問題行動の低年齢化も含めて小学校のほうが特に頑張られた点なのかなというように私は受け止めておるところです。

というとこで、どこまで言っていいか分かりませんが、取りあえず資料の１の検証のと

ころまで話をさせてもらいました。

○市長　ちなみに、今の門田さんの話でいうと、参考資料の２を見てください。

不登校の推移とありますけど、中学校は数は少し増えてはいるんですけども、全国平均との関係でいくと、今までは全国平均よりも多かったものが下になってます。全国で幸福度ランキングってあるんですよ。政令市の中で岡山はどんどん上がってるんですね。４年前が12位、20位中ね。２年前が11位で、一番新しい資料は５位になってるんですよ。その中の指標に不登校とあるのね。不登校というのは、この一つの指標という中に、今、門田さんがおっしゃったように単に学校に来る来ないじゃなくて、その背景にある、どれだけ授業が理解できてるかとか、どれだけ優しさを持っているかとか、そういったものがあるがゆえに指標になってるんじゃないかなというように思います。もちろん数が増えてるのは残念ではありますけど、私は中学校の先生方が随分ご努力をされたんだというように思っております。

じゃあ、小学校長会、お願いいたします。

○清廣小学校長会長　検証ということでいいますと、私はこの４年間で感じたのは、学力向上でいうと、教職員の間に岡山市全体で統一して学力の向上を図っていこうという意識がすごく高まってきたなということを感じています。教育委員会のほうから「授業これだけは」とか「家庭学習これだけは」というようなことをいろいろと出されていて、岡山市として共通して取り組んでいこうという、とても内容が分かりやすいものが示されてきました。実際にもうどの学校でもそれを大事にしながら授業づくりを進めてくることができたと思います。

それから、全国学力・学習状況調査の学校質問紙の中で、岡山市が全国に比べて小学校も中学校もとても高いのがあって、それは何かというと、「小学校間、小学校同士、それから小学校と中学校間での合同の研修を行っているか」という、それが岡山市は全国に比べてとても高いということがありました。先ほど中学校の授業改善のことを言われましたけれども、小学校同士、同じ中学校に進むということで、足並みをそろえて、いろいろ一緒に研究したり、それから小学校と中学校のお互いのよいところをしっかりと取り入れようとしたりして話合いが進んでいきました。ということで、今の教育大綱には授業改善に向けた取組が効果的に行われるような仕組みづくり、場づくりを行っていくというような方策が書かれていますけれども、それがしっかりとできてきたなということを実感しているところです。

それから、問題行動とか不登校についてですけれども、ここの資料の１にも書かれていますように、一人で抱え込むのではなくて、学校全体で取り組んでいこうという意識が随分高まってきました。それだけではなくて、関係機関との連携とか、それからこの間もあったんですけれども、中学校の生徒指導の先生が小学校の不登校とか問題行動について話し合う会に出席をされて、そこでいろいろな意見を交わすと。そういったような会も前はなかったんですけれども、できてきたということで、そういったような連携がしっかりと進んだということも大事なことだなと思っています。問題行動とか不登校は、楽しく通えるような学校づくりとか、それから学級づくりとか、それから授業づくり、そういったようなものが大事なんですけれども、家庭の状況とか、いろいろなことが絡んでいますので、これからも一層連携を強化して取り組む必要があるなということを思っているところです。

検証については、以上です。

○市長　ありがとうございました。

清廣会長からも結構高い自己評価だったというように思います。取りあえず今までの３年間、４年間を振り返っての話でありましたけれども、今後の話は、じゃあ取りあえず横へ置いて、今までの３、４年間を見て、教育委員の皆さん方の感想といいますか、意見をお願いしたいと思います。どなたからでも結構ですが、石井さん、行きましょうか。

○石井教育委員　失礼します。感想ということですけども、検証の部分については、まずこの２つの目標、「学力の向上」と「問題行動等の防止及び解決」に焦点を絞ってやりましょうというように決めていただいたということで、本当にたくさんの課題があると思うんですけれども、ここをやるんだということを決めていただいたことが非常に大きかったんじゃないかなというのを改めて感じますし、一市民として、一保護者として、ここにフォーカスしていただいたのは本当にありがたかったなというところと、それをこれだけの巨大組織の中で連携して進めていっていただいたということは本当にありがたいことで、すごいことだなというように感じております。

あとは、全国的に比較してというところは、相対的にどこまで見てというところはあるかもしれないですけども、全体的にもよくなってきているんではないかなというようにも思いますし、よかったと思うんですけども、この不登校のところだけは若干グラフだけを見ると上がっていってるというところを今後これを絶対値として下げていくと。相対的にということだけじゃなくて、絶対値として下げていくということを目標に掲げるというこ

とであれば、ここはかなりまたさらに一歩進んだ手が必要なんじゃないかなというのを感じております。

以上です。

○市長　では、片山さん、お願いします。

○片山教育委員　失礼いたします。私もこの検証に関しまして、保護者として学力というのはすごく重く、我が子を育てながら一番気になるところだと思います。そういったところで向上していってるというところは安心できる材料ですし、あと今の校長会の先生方のお話を伺うと、すごく先生方とか学校間とか、あるいは地域の連携、関係機関等の連携の中でつながって来られてるという感じがすごくして、それぞれが自分の持ち場というか、役割を遂行するとともに、その役割をより推進していくに当たって手を組むというか、そこに多分対話というのがすごく増えているんじゃないかなという印象を持ちました。

問題行動とか不登校に関しても、不登校の場合もなかなか対話を持てないということで引き籠もる、なかなか学校というところに足が向かないとか、問題行動に関しても対話ができないから行動に出てしまうというところを考えると、先生方の対話力というのが、対話を進めてくださった、そういう先生方の土壌とか風土が今度は子どもたちの中に先生に言ってみようとか、多分、全国学力調査の中にも確か「先生が自分たちのいいところをよく分かってくれている」という指標で高かったかと思うんですけれども、そういったところで自分の思いが先生に言える。そして、そこから先生から子ども同士をつないでいただいて、学校に友達がいるから行ってみようとか、そういった横のつながりがだんだんつながって面になっていくことによって、より学校の組織が居心地のいい場所になり、成果がまたさらに上がっていくんじゃないかなということを感じました。

以上です。

○市長　ありがとうございます。

では、妹尾さん、お願いします。

○妹尾教育委員　失礼します。

○市長　検証のほうを。

○妹尾教育委員　検証のほうですね。石井委員がおっしゃったことと重なる部分はあるんですけれども、現場の先生方のご努力には本当に敬意を表します。あと、この検証が目に見える形で、要するに数字と結びつけられて設定されてるというのがこういった振り返りが可能になるという意味で、この点が大きいのかなというように思いました。残念ながら

不登校のところが増加してるということで全国的な傾向でもあるわけですけれども、様々な背景があって、こういうようになってるということなんだろうと思います。次期の教育大綱でも課題の一つに挙げられることになろうかとは思うんですけれども、またそこは後で議論させていただきますが、一定の成果が得られたということで次期につなげるステップになるということなんだろうというように理解をしました。

○市長　では、河内さん、お願いいたします。

○河内教育委員　失礼します。学力についてですが、平成28年度の状況からしたら、もう小・中ともに上がり下がりをたどりつつも全国平均レベルになったということは、これは非常に成果が出たというように言っていいのではないかなというように思います。資料１の成果として挙げられているところにも書かれていますけれども、各学校で校長先生を中心に校内研修などを実施して授業改善を図ったということで、やはりこれが成果につながったんだと思います。先ほどもそれぞれの校長会長様から非常にそれが進んでいるというようなご発言もあって、まさにそうなんだろうなというように思います。特に中学校での改善というのが飛躍的に進んだと受け止めています。

この授業が変わったとか授業が楽しくなったと実感するということが、さらなる授業改善の原動力になっていくと思うんですね。先生自身が授業改善することの楽しさを知る。そして、子どもたちが楽しい、頑張ろうと意欲を持つ。さらには、保護者も、ほほう、いい授業だと感じるということで、ますます授業が充実してくるというような、よい循環が生まれてくるんではないかなと思うんです。実は私の親族に岡山市の小学校に通っている子どもがいまして、今６年生なんですけれども、その母親が、おばちゃん、新しい学習指導要領になって授業が変わったんよと、先生があまりしゃべらないで、子どもたちが考えて、どんどん発表するんよと興奮ぎみに言うんですね。その横で子どもも、そうよ、もういっぱい発表してるんだからというように自信満々に子どもも伝えてくれました。

実はその学校は岡山市教育研究研修センターの研究協力校であるということを私の立場では知っていたわけですけれども、そんなことは知らない一般の保護者が授業参観に行って授業が変わったと、それから子どもも自分は成長したんだと、そういうふうに実感できるってすごいなというように思いました。それと同時に、センターの力って大きいなというように感じています。授業改善といっても、授業改善するには校長先生中心に学校の校内研究を充実させていくということが大切で、その校内研究を充実させるためにはセンターの適切な指導助言ということが求められてくるのかなということを感じています。

以上です。

○市長　どうもありがとうございました。

保護者も生徒も変わったというように話をされてるということで非常にいいことだと思うんですが、私は今日何よりも校長会の会長さんお二人が胸を張って、この３年間の成果を言われてるというところに大きな意味はあるんじゃないのかなというように思います。本当に従来でいくと先生だけじゃなかなかできないよと、地域の人たち、保護者の方々がというようなことでエクスキューズをされるケースが多かった。実際そういうようにお話をされたいときもあると思います。ただ、教育の相当部分を占めているのは先生なんで、やはり先生が変わっていただかないと物事が変わらないというのは今回ので本当によく分かったんじゃないかなというように思います。全ての先生方に感謝の意を表したいというように思います。

ということで、これからなんです。これからどうするかということであります。門田さん、清廣さんから、またお話をいただいて、今度は逆回りに意見を言っていただきたいというように思います。教育長も今度はこれからの話なんでご発言を最後にお願いをしたいと思いますが、では門田さん、お願いいたします。

○門田中学校長会長　それでは、資料２を見ながら話をさせてください。

これまでの取組の継続を当然すべきだと思います。その中で、若手教員、今現場では本当に若い先生がすごい増えています。変な話、ある学校の社会科の教員が大化の改新を知らなかったとか、これは聞いた話なんですけど、それは例外として、若手の先生をどう育てるかというのは大きな課題だと思います。今年度センターの取組でＯＪＴ、若手の教員同士が学び合うという取組も始まって本校も名乗りを上げてやっていますが、非常にありがたかったというか、ああいう教員同士が学び合う、若手が育つ、そんな取組がさらに充実していただいたらなという気がします。それも含めて継続だと思っています。

それから、不登校のことで、本校は非常に不登校が多いんですが、改めて教育の限界を超えてるというか、福祉の手を借りないとなかなか学校だけでは無理だというか、そんなことに直面しているように思います。担任の先生方が、各クラスに不登校の子が何人かいる。日頃の授業を終えて、次の日の準備を終えて、不登校の生徒のところに家庭訪問に行く。それも１人だけじゃないですから、１週間のうちで月曜日はこの子のところとかというふうに決めてやりながら、それでもなかなか保護者にすら会えない家庭もいるという中で、なかなか福祉の力を借りないと限界だなという、目の当たりというか、厳しい現実も

あります。

そういった中で、また話は戻るんですけど、やはり学校教育といいますか、改めて子どもたちにとって楽しい授業であったり人間関係づくりであったり、そういったものを強化しないといけないなという気がします。

資料の中ほどには課題があって、その下に当然取組、具体策が出ているんですが、ややＩＣＴがいきなり出てきて、この辺はどんなかなという気はちょっとしました。もちろんこれからＩＣＴは大切で、ＧＩＧＡスクール構想も始まり、どんどん入ってきます。これをうまく取り入れないと、これに振り回されることになるなという気もします。それから、英語の力に関しては、当然中学校、もちろん小学校もですけど、力を入れていかないといけないという気がしています。

ということで、継続と発展については、若手教員の育成の充実を図ったり、それぞれの関連性を持たせたりすることが大切なんだろうなという気がします。

○市長　資料３も。

○門田中学校長会長　資料３、活用力、表現力、向上心、社会性、人権尊重の精神、この５つの柱でいっていまして、完全に分けられるわけではないと思いますけど、上の３つがどちらかといえば学力のほうかなと。それから、下の２つが育ちに関して、不登校ですとか問題行動の検証、こういったあたりで取り組まれている指標になっているんだろうなという気がします。

その流れの中で最終的には一番上に戻るんですが、「自らの個性を磨き、選択と挑戦を繰り返す」、まさしく本当に子どもたちが今からの世の中で個性を輝かせてほしいなという気がします。学校に行っていなければ、悪いことではなくて、学校に行けなくてもそれぞれの子どもの考え方があって、しっかりした子どもたちもいます。そんな中で個性を磨くことができるであったり、子どもたちにとって様々な選択、これから選択肢が増えたりするわけですが、どんな子どもたちが選択をして、それに対して挑戦をしていくかという意味で、学校がそれぞれ取り組んでいくことができればなという気がします。

以上です。

○市長　福祉の手を借りるというのは、会長さんのイメージで具体的にはどういうふうに借りればいいわけでしょう。

○門田中学校長会長　既に子ども相談主事なんかに入っていただいて、家庭訪問なんかも繰り返しています。要は人数とか時間が教員だけでは足りていない。そのあたりのフォロ

ーをしていただいたら助かるなという気がします。

○市長　分かりました。

　では、清廣さん、お願いいたします。

○清廣小学校長会長　資料２と３と合わせたようなことで意見を言わせていただこうと思います。

　これからの子どもたちに必要なことというのは、大きく分けて２つに分けれるのではないかなと私は思っています。１つ目は、自分を高めるという自分自身のことです。それから、２つ目は進んで人とか社会に関わるという、その２つが必要なのではないかなと思っています。自分を高めるためには、まず今の自分を好きになって肯定的に捉えるということが大事なんですが、岡山市はこれまでの調査では、例えば「先生は自分のよいところを認めてくれている」と答えた割合がとっても高いです。そして、「自分にはよいところがある」と答えている児童・生徒の割合も全国平均よりとても高くなっているので、これは岡山市のすばらしいところだなということを思っています。

　自分を好きになれば、もっと自分を高めていこうという気持ちも出てくると思うんですけれども、子どもたちに夢とか将来の目標とかというのを聞いても、なかなか答えることができないということがあります。漠然とこうなりたいということはあるんだと思うんですけれども、子どもたちが将来の夢とか目標を持つということが私はとても大事じゃないかなということを思っています。実際これが全国の調査でもあまり高くない数値になっています。なかなか夢を持ちにくい時代ではあるかとは思うんですけれども、子どもなりに夢とか志とか、それから目標を持って、自分はこんなふうに生きていきたいなというような、そういったような気持ちを持つことができたら、例えば困難なことがあってもそれを乗り越えようと頑張ったり、それから選択という言葉がありましたが、楽なほうではなくて、あえて苦しいことを選んだりとか、そして挑戦という言葉がありましたけれども、自分でやってみよう、果敢に挑戦しようというような気持ちが出てくるのではないかなということを思っています。

　岡山っ子育成条例の家庭の行動指針の中にさざ波体験という言葉があって、私はよくこれを新１年生の説明会にも使うんですけれども、いきなり大きな挑戦じゃなくても、小さなこと、ちょっと困難なこと、大変なことに挑戦して、それを達成したという経験を積むと。この繰り返しがこれから困難とか苦労とか、そういったことに耐える力のもとになっていくのではないかなということを思っています。やればできるんだという自己効力感と

いいますか、そういったことが子どもたちの成長につながっていくのではないかなということを思っているところです。

それから、２つ目に必要だと思うのは、進んで人とか社会に関わるということだと思います。いろんな考え方があって、それぞれによいところがあるということをまず認めるということと、あとはそのよいところを生かして一緒に解決していこうとか一緒に取り組んでいこうとか、そういったような協働の力というのをもっともっと付けていきたいなということを思っているところです。授業でも互いの考えを伝え合うとか、それからいろんな考えを理解して集団としての考えを作り出していくと。そういったような過程をこれから大切にしていかないといけないなということを思っています。

今コロナ禍であまりできてないんですけれども、小学校でもペアとかグループで話合いをします。自分の考えを伝えるということは言葉では大分できてきていますけれども、それを分かりやすく記述するというようなことは、なかなか十分ではないかなということも思います。プレゼンテーションをして分かりやすく示すということもなかなか十分ではないので、そういったような面でＩＣＴの活用だとか、それから記述に力を入れるだとか、そういったようなこともとても大事になってくるんじゃないかなということを思っているところです。

自分らしさを大切にして、夢や目標を持って、それに向かって頑張るということ、それから人や社会に進んで関わっていくと、この２つの大きな力があれば、今後子どもたちは大きく伸びていくんじゃないかなと、変化の大きい時代にしっかりと生きていくことができるんじゃないかなということを感じているところです。

○市長　ありがとうございました。

小学校を卒業して山ほどたってるんで、小学生の夢って、どんなイメージなんですかね。

○清廣小学校長会長　夢を聞いてみても、なかなか子どもたちは答えないですね。スポーツを習っていたりすればスポーツ選手にとかというようなことはありますけれども、こういうふうになりたいとかというのは、なかなか描けないというところがあるのではないかなと思っています。職業でなくても、こんなふうにというのが自分でイメージできたり、こんなことができるようになりたいなという子どもなりのものが持てたりするといいなということを思っています。

○市長　この資料３の中に「自分の将来の姿をイメージし」というと、何となく中学生だ

と感覚は分からないでもないんですけど、小学生の場合、これはちょっと違うのかなと思ったりもするんですけど、どうでしょうか。

○清廣小学校長会長　なかなか小学生のときに将来の姿をイメージするということは……。

○市長　ないですよね。

○清廣小学校長会長　難しいかもしれませんが、道徳とか、いろんなことで生き方とか、あっ、こんなときにはこっちを選びたいなとか、子どもの年齢に応じた選択といいますか、いいほうを選択したいとか、こんなふうに生きていきたいという漠然としたものはありますね。

○市長　こんなふうにって、例えばどんなんですかね。

○清廣小学校長会長　例えば、思いやりの心だとか、それから困難なことに向けて努力するだとか、そういったようなことができる自分になりたいなというようなイメージがあるということで、まだ将来の姿というところまでは行かないかもしれないですね。

○市長　ありがとうございました。

　それでは、河内さん、お願いいたします。

○河内教育委員　失礼します。まず、資料２のほうに関連して、先ほど門田会長がＩＣＴがいきなり出てくると、ちょっとねというようなお話があったんですが、今岡山市がタブレットの配付も早めの設置を進めてくださって、いよいよそれを今度は使っていくというときに、かえって中学校というのは教科の枠を超えて、このＩＣＴをどの教科でもどんなふうに効果的に使っていくかというのが一つの共通の研究のテーマになって、いいチャンスなのかなと、研究を深めていくという上で。それを通じて授業改善していくという、本当にとても貴重なチャンスではないかなというように思うんですね。そのために、なかなか得手でない人も教員も多いので、市教育研究研修センターのほうで指導助言していただけるような、そういうことが整っていけば、本当にここがいいチャンスなんじゃないかなというように思っています。

　それから、資料３で自ら、選択と挑戦を繰り返すというのは、これ、すっごく私は気に入りました。自分の人間の目標そのものじゃないかなと。もう何歳になっても死ぬまで、自分の人生を照らし合わせてみても、やっぱりこういう繰り返しであるなというような思いがしています。それから見たときに、その指標の中に不登校の出現率というのがあるんですけれども、不登校の出現率を減少させるというのは本当に大きな命題で、不登校の入

り口のところで迅速で丁寧な対応をするということが確かに最も重要なことだと思います。

ただ、不登校というのは様々なケースがあって、不登校に陥らせない、何としてでも学校に来ることができるようにするということが必ずしも適切とは言えないケースも多々あると思うんです。学校を休むという選択や出席する授業時数を減らして無理のない登校をするという選択が劣等感を抱くことなく堂々とできる、そういう環境を整えていくということも大切なんじゃないかなと。それから、ＩＣＴを活用してオンラインで自宅で授業を受けて、それが出席としてカウントされるとか、そういう環境整備なんかもこれからは必要になってくるのかなというように感じました。

したがって、ここに指標として不登校を持ってくるというのは非常に厳しいのかなと。それよりも全児童・生徒に共通する指標として、例えばＳＤＧｓとか、ああいう活動を今どの学校でもいろいろ取り組んでいると思うんですね。社会貢献とか自分にできることを生活の中でやっていくとか、そういうものが何か指標として表せるようなものがあればいいのかなというように感じました。

以上です。

○市長　ありがとうございました。

それでは、妹尾さん、お願いします。

○妹尾教育委員　いただいた資料３に関して、ちょっと感想めいた話になりますけれども、お話しますと、まず全体的な方向性や掲げられている必要な力、それとこれが後日検証可能なように指標という形で定量的に示されているという構成、それ自体には非常に大賛成というか、よいだろうと思います。

ちょっとおやっと思ったり気づいたりしたところで申し上げますと、まず先ほど市長からもご指摘があったんですけれども、「自分の将来の姿をイメージし」というところが、ううんという感じでした。私自身のことで振り返ってみても、小学生、中学生の頃というのは自分の可能性に気づくというところはありましたけれども、明確に何か自分の将来像をイメージしてというような感じではなくて、15歳で可能性をどんどん切り捨てていった感じはあるんですけれども、自分の可能性に気づく期間なのかなという、そんな感じがしました。

あと、必要な力ということで、主に学力に関わることだと思うんですけど、活用力、表現力、向上心、これはもうそのとおりだと思うんですけれども、今すごく社会の変化が激

しくて、どんどんこれは加速していくんだろうというように思ってます。私が小学生時代の頃を振り返ったら、多分車にはタイヤがないんだろうなと思ってたんですけど、タイヤは今なおありますし、ただ逆にタブレットなんてものは全く考えもしなかったようなことが起こってるわけで、そういう意味で、もちろん活用力、表現力、向上心という指標というか、目標を設けるというのは重要なことだと思うんですけれども、その一方で変わらないものというのか、どの時代にあっても変わらない、特に小・中という公教育に要求される基礎的な事柄というのは忘れないようにしていかないといけないのかなと思いました。

それと、河内委員さんもご指摘されたんですけれども、社会性の指標のところで新規不登校児童・生徒の出現率の低下というのを指標として挙げるのがちょっと違和感があるというか、児童・生徒の社会性という能力、個々の能力であるとかとは離れて様々な背景でこれが生じていて、学校教育だけの問題なのかというと、家庭の問題であるとか社会一般の問題であるとかも非常に根深いものがあろうかと思うので、ここは社会性の指標として挙げるのは、率直に言ってどうなのかなという気はいたしました。

○市長　何がいいと思います。

○妹尾教育委員　そう言われると、なかなか何をというのがあれなんですけれども、先ほど河内委員がおっしゃったようにＳＤＧｓだとか、そういった何か社会性、人権尊重の精神ということで、一口に言うと主体性だとか自律の問題だと思うんですけれども、より適切な指標が、具体的には言えないんですけれども、あったほうがいいのかなというように思いました。

○市長　ありがとうございました。

私もタイヤはなくなると思ってましたけどね。関係ありません。すみません。

片山委員、お願いいたします。

○片山教育委員　私も非常に自分の将来の姿をイメージして、本当に個性を磨いて、選択と挑戦を繰り返す子どもができたら、どんなにみんな生き生きと社会の中で活躍できるだろうかというようにすごく思いました。確かにうちは小学生の娘がおりますけれども、将来の姿といったときに、なかなか言ってはこないです。ただ、コロナ禍の臨時休校の後、中学生や小学生の子どもたち、うちの子どもたちも含めてですけれども、どんなふうに学校に帰っていくんだろうかと思ったら、予想以上にすんなり学校に帰っていったというのがすごく印象的でした。お友達の中にも来にくいお友達はいないかと聞いても、いや、そんな人はいないというようなことをうちの周りの子どもたちに関してですけれども、言っ

ていますし、何が楽しいって、やっぱり学校で友達と関わるということがすごく魅力的な状況があるようです。そういった中で、友達と一緒にいるからこそ個性も光るといいますか、一人では個性ってなかなかないもので、人と一緒にいるからこその個性の中で自分がしっかりと表現していけたらいいのかなというように思います。

そんな中で、今後の課題の中に記述式問題の正答率の改善が不十分であるとか英語力というようなことを挙げてくださっていて、そういった意味での、先ほどもちょっと申し上げてしまったんですけども、言葉の力と申しますか、コミュニケーション力とか、そういった言葉というところにもう少し注意を払って、しっかり小さいうちから育てていっていけると、自分自身への理解もきっと言葉ですることだろうし、人に対して自分を表現するときも言葉は一つの媒体になるだろうし、つながる中でもそうだろうなというように。英語に関しても、やはり言葉。言語なので、しゃべりたい、伝えたい、その向こうに伝えたい相手がいるということが大事かなというように思います。

そんな中で、日々いろんな学習の中で自分の力を蓄えていく中で、娘とか息子のノートとかを見せてもらうと毎回目当てがきっちり、その日の時間に何を学習するかというのが必ず赤ペンで囲んであって、先生たちが子どもたちに目標を持たせて、その大事な45分なり50分を過ごさせてくださっているんだなということも、そういった言葉で自分の中でしっかりめあてを落とし込んで、その日の学習課題に挑戦したり、達成感を持って振り返りをしたりというような力のサイクルがもっともっと大きくなって長期的な視点で持てるようになると、選択と挑戦を繰り返しながら自らが個性を磨いていけるような子どもが育っていくのかなというような印象を持ちました。

以上です。

○市長　英語力というのは、日本語よりは上回ることはないというのが当たり前ですよね。だから、国語って、自国語というのは本当に重要だろうと私も思います。そういう面で無解答率が高いというのは日本語を理解してないというところに大きな問題があるんで、そこはやっぱり変えていかなきゃならないだろう、おっしゃるとおりだと私も思います。

それでは、石井さん、お願いします。

○石井教育委員　まず、将来の姿のところでご議論があったので、私自身はこの将来の姿で示されている「一人ひとりが、それぞれの立場で社会に貢献し、自分の幸せを創造する」、これはもう非常にいいテーマだなというように思いますし、自分一人で大人になっ

て、自分一人じゃ生活は成り立たないし、それで社会に貢献することで自分自身が自分自身の幸せを自分で作っていくということを子どもの頃から知っておいていただくというのは、すごく価値があることじゃないかなというように思ってます。小学校の時点で、その具体的なイメージができなくても、そういう前提をよく知っておいていただくということは、すごく価値のあることではないかなというように感じました。

それから、市長が最初におっしゃられた４つの視点のところで意見を述べさせていただくと、まずこの偏差値50以上ということでされていて、51とか52とか53にしてないということについては、多様性でそれぞれで可能性を見て選択していっていただくという中で考えれば、ここであえて52とか53とかというのを設定する必要はやはりないのかなというように感じました。

それから、２点目のとがった人間とその復活というところのことですけども、この資料の中で見させていただくと、この選択という言葉はすごく際立った言葉だなというように捉えてます。学校生活の中で選択ってどういうことがあるのかなというように考えたときに、部活を選択するとか、そういうことだけじゃなくって、日々の生活の中で、例えば友達との関係でうまくいってないときにどういうふうに自分で対応するか、そのそれぞれの場面で選択ってたくさんあると思いますし、家で勉強するときにどういうようなやり方でやるかと、そういう選択もあると思うんで、そこのその選択というところが人によって捉え方はそれぞれあると思うので、もうちょっと具体的なプロセスというか、何が選択なのかというのは示してあげてもいいのかなというようにも感じました。

３つ目の５つの整理については、新しい学習指導要領で示されてるのは３つの整理で、その３つのうちの整理の最初の基礎能力を除いた２つの整理を５つに分解されてるように拝見してます。なので、よりそこの部分が具体的に見えるような形になっているのかなというように理解しております。なので、そこの学習指導要領の３つのことと、この５つがどうつながってるのかというのが学校の先生方にも分かるような形というのは必要なのかもしれないなというように感じました。

それから、４つ目のその指標のところについては、例えばこの社会性と人権尊重の精神でいうと、社会性のところでは同じ方向で取り組んだりする力というのがある一方で、人権尊重は多様性を認めということで、どちらかというと反対のことが書いてあるんですけども、そこの部分をどういうように整理して指標としてまとめるのかというところは、この人を大切にできる児童・生徒の増加より、もうちょっと具体的な指標もあってもよさそ

うな感じもするなというように感じております。

あとは、全体としては、皆さんおっしゃるとおり、社会が大きく変化する中で、この中身を見ると新しいこの教育大綱の中身も大きく変わってるんだと思うんですけども、言葉として見たときに、ここが変わったんだという、これは新しいぞという感じを、わくわくするような感じをもう少しいただいたほうが、一般の市民としては、わあ、変わるんだみたいなのが伝わってくるという、そういう感じもしておりますけれども、内容は変わってるんだというように理解しました。

以上です。

○市長　わくわく感を出すために、どうすればいいですか。

○石井教育委員　そういうワードを、言葉だけが独り歩きするようなワードって本当はどうなのかなというのもあるんですけども、やはり引きつける言葉というのも、何がいいのかというのは分からないんですけども、あってもいいかなとも思います。

○市長　ありがとうございました。

では、教育長。

○教育長　皆さんの意見をずっと拝聴していて頭が全然整理できてないんですけども、私は教育委員会の人間として、どういう目標になろうが、必要な力をどうやって付けようかということを考えたときに、やはり学校現場とか先生一人一人をどうしていくかというところにいつも頭が働きます。学校現場を幸いによく見る機会がありまして、数年前と大きく違っているのが、門田先生もおっしゃってましたが、もう若手の教員が物すごく増えているんですね。これをどうにかしないといけないというように思うんですけど、その辺簡単に年を増やすわけにもいきませんから、何とかいい方法を見つけていくといいますか、これについては実はＩＣＴが非常に大きな力を発揮するんではないかなということを思っていて、恐らくベテランの先生よりはそこの力は長けているので、そこを力を入れていくというのはあるのかなと。

それと、若手が増えているから、より大切にしないといけないのが、やっぱりチーム力だと思うんですね。昨年ラグビーでワンチーム、ワンチームということではやりましたけど、チームというのは非常に大きい力があって、１足す１が４にも５にもなっていくんではないかなということを思っています。それは校内のチーム力、教室のチーム力もあるでしょう。それから、保護者や地域を巻き込んだチーム力もあると思うんですけど、そういったチーム力を高めるために、校長先生がその核となって取り組んでいくということが大

きいのかなと、これは絶対必要なとこではないかなということを思っています。

若干具体的なところに話を持っていきたいと思うんですけど、資料３の活用力とか表現力とか向上心とかという必要な力を我々出していますけれども、その力をつけるのに実はこれが指標になかなかならないので難しいんですけど、一番効果的なものは総合的な学習の時間の充実だと思うんです。それともう一つ、道徳の時間。教科になった道徳の時間の充実だと思うんですね。教科の取組も当然今までどおりやっていかないといけませんけど、我々が子どものときにはなかった、今は３年生以上は総合的な学習の時間というのを取り組んでます。その総合的な学習の時間をどんどん活性化して充実させていく。それは実は地域とどんどんつなげていくと。

特に中学生なんかは、地域にどんどん出ていって、総合的な学習の時間を使って、職場体験だけではなくて、どんどん地域に行って地域を動かしていく。そういう原動力になってくれたら、そのためにはもう絶対勉強していかないと、普通の基礎的な勉強もしていかないといけないし、知識もどんどん吸収していかないといけないので、そういう動機づけのためには、そういった取組をしっかりやっていく。

それから、道徳には即効性はないと言われますけども、道徳の時間を大切にして取り組んでいけば、そのときそのときの判断力がより正しいものになっていくんではないかなと私は経験上思っています。したがって、この総合的な学習の時間と道徳の力を先生たちにしっかり高めていただくということが非常に効果的な取組になっていくのではないかなということを私は話を聞きながら思いました。ちょっと方向がずれたかもしれませんが、そんなことを思っています。

○市長　私が思っていることを少し申し上げたいと思いますが、まず今の教育長の発言ですけれども、総合力と道徳の充実がこれが本当に役立つということを何らかの形で立証するというのも重要だと思うんですけど、それでやるんであれば、これで指標にならないことはない。必ず全て総合力というものを分析していき、それを定量化していく。それは私はあり得ると。だから、それは教育長がそういうように思って、校長会もそれで行くということならば、それを指標化すれば私はいいんじゃないかなというように思うんですよ。だから、数字、完璧なものにはならないかもしれないですけどね。そこはできると思いますんで、ぜひとも教育委員会で議論をしていただきたいというように思います。

それから、妹尾さんのおっしゃった、自分の将来の姿というのは、私ちょっとここだけは違和感がずっとあって、子どもたちはそこまでのところまではあまりなくっていいんじ

ゃないかと。そう言ったって、子どもは、自分が中学校のとき、少なくとも小学校のときに将来の姿を完璧に描いているような人はいないですよね。だから、ちょっと表現が違うかなというのが１つあります。それから、選択と挑戦を繰り返すというのは、これは石井さん、この今の学校内でもそうなんですが、将来的にそういうことができる子どもたちというイメージで私は整理したほうがいいのかなというように思ったんです。

それから、何人かの方がおっしゃいましたように、社会性のところで新規不登校児童・生徒の出現率の低下、実はこれが一番今日お出しをするときに議論になったところであります。参考資料２をもう一回見てください。

この不登校自身がずっと伸びている。いじめも伸びているんですが、この暴力行為といじめというのは、これは私は捉え方によって変わってくるんで、いじめがぐっと伸びてるというのは、逆に言えば、先生方が一生懸命いじめを見つけようとすると数が増えていく。しかしながら、不登校というのはこれは客観的な指標で取ってますから、裁量的にこうやって伸びていくのではない。となると、何で伸びてるかというところが重要だろうと思うんです。分析したものはあるんだろうと思うんですけれども、単純なことを考えていくとグローバル化等々により格差の拡大というものがあって、先ほど門田さんがおっしゃったように福祉の世界に助けを借りなきゃならないというのは、逆に言うと貧困とか、そういう問題がそこに生じている。となったときに、ぐっと全体の不登校率が上がるようになって、上がらざるを得ない環境になってる。そういうときに出現率の低下という表現というのが果たして妥当なのかどうかというのが、私はこれが一つ指標としてやるのでいいのかどうかという問題。

それから、社会性といったときに、不登校ということだけでよいのか。不登校の原因というのは、先ほどお話があったように、生徒が学力がついたかどうかとか、そういうのも全部出てきたものでの出現率だろうというように思うんですね。だから、社会性というところで、この指標をやるのがいいかというのは教育委員会のほうには指摘したままだったんですけども、なかなかいい知恵がないから今日に至ったところがあるんですけど、ここは社会性のところで出現率の低下ということで0.47以下にするというのは、あまりふさわしくないかなという。ただ、不登校というのは非常に大きな問題ですから、これをどうやって抑えていくかというのは、この５つの基準とは別に何かあってもいいような気はするんですね。

そこは教育長以下の教育委員会と先生方がどんな指標にしていくのかが先生たちのやる

気というか、それができるかどうかという可能性があるわけで、そういう中で見つけていただくということなのかなという気がするんですね。だから、ぜひともここは教育委員会と校長さん方との間、ないしは校長と先生方の間で議論をしていただければいいのかなというように思っております。

以上ですが、確かに若手の先生というのが、今度、岡山市にとっても非常に大きな今ポイント、これはウイークポイントでもありますし、グッドポイントでもあるような、両方の要素を持っていると思うので、それらをどうするかというのは確かにちょっと抜けてるような気がしました。

以上でありますが、あと10分あります。今までの意見を踏まえて、ご意見ある方はぜひともお願いしたいと思います。

一番これに携わった岡林さんとか谷岡さん、何かあれば、つなぎというのもというのじゃないですけど。譲り合いの精神。

○岡林教育次長　譲り合いをしてしまいましたが、選択と挑戦という非常に分かりやすいフレーズを先生方がどう理解していただくかというのが私的には非常にこの新しい大綱を出したときに興味のあるところであります。実は義務教育最終段階が子どもたちにとって一番大きな選択と挑戦の場面なんですよね。それに向けてどう育っていくかというところ、そんなところが見えたらいいなと思ってこんな言葉が出たんだろうと思いますし、それから事務局として議論になり気になっていたところはどんどんご指摘いただきましたので、そこら辺を少し精査して、より精度のいいものにまたご提案していきたいというように思っております。

○市長　新たな具体的な提案はなかったですけどね。

何かほかにどうでしょうか。

よろしいですか。

教育長、言い足らないことがあったら。

ぜひ私、教育委員会と先生の中で大きな面での指導的立場という面は教育長だろうと思うんですね。だから、そういう今の総合的な総合力のアップが本当に必要ならば、それを一般の市民の方に分かるように説明をして、それを指標化して提示していく。こういうことって、すごい重要なんじゃないかなというように思うんですよね。

○教育長　ちょっと違うのが、すみません。

○市長　はいはい、どうぞ。それがいいんです。

○教育長　総合力ということではなくて、実は今学校には小学校にも中学校にも総合的な学習の時間という、１週間の中で３時間ぐらいの時間があるんですね。それは実は教科書もありません。先生たちが一生懸命考えていって、子どもたちにこういう力をつけようとして、もういろんな取組をしていく。しかも、体験活動をどんどんさせていく活動なんですね。そこを充実、活性化していくということで話しました。

○市長　市民の一人である私が全く理解してない。いや、それが重要なら、今度は充実という２文字って分かりやすいんだけど、エクスキューズは幾らでもできる。それを、じゃあどう具体的に高めていくのか、それを先生方と議論して、一つのもう少し具体性を持ったものにしていただければ、それが今度は保護者の皆さんだとかに伝わっていくんじゃないのかなというように思いますんで、岡林さん、教育長の意を受けて、ぜひ整理をしていただければと思います。

じゃあ、よろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長　本日の議論を踏まえて、もう一度書き直して対応させていただきます。

これは今年度終わるんですか、ここは、総合教育会議は。もうこれで終わりですか。

○司会　いえ、まだ２月に再度予定をしております。

○市長　分かりました。じゃあ、今日の意見を踏まえて、ぜひ教育委員会、校長会、先生たちの間で議論を闘わせていただきたいと思います。それで、自分たちが目標を定めて、自分たちが作った目標ということで動いていく。これが私は原動力になっていくんではないかなというように思います。やはり人材の育成なくしてよくならないと思いますんで、ここには本当に先生方、この３、４年よくやっていただいたと思うんですが、これを継続して、将来的には子どもたちの幸せにもつながりますんで、ぜひともお願いをしたい。そして、それで出来上がったものをまた２月にお示しをしてご議論いただき、最終版にさせていただきたいというように思いますので、よろしくお願いいたします。

では、事務局、お願いします。

○司会　ありがとうございました。

次回の会議は、改めて通知をさせていただきます。

以上で令和２年度第３回総合教育会議を閉会いたします。本日はどうもお疲れさまでした。

午後４時53分　閉会